



作付け面積・生産量日本一の スチューベンをPRだ!!

糖度が18度から22度ほどと、ブドウの中でも群を抜いて甘いスチューベン。生産量日本一のスチューベンを全国に広めるため、町がPRに動き出しています。



△子どもたちもスチューベンの食べ放題に挑戦



△スチューベンの果汁を生地に練り込んだ棒パン焼き体験も大人気

日本一!! スチューベンぶどうまつり

町が作付け面積・生産量ともに日本一を誇る特産のスチューベンを味わってもらう「日本一スチューベンぶどうまつり」が、10月8日（土）から10日（月）まで、道の駅つるた「鶴の里あるじゃ」で開催されました。期間中はあいにくの雨となったものの、3日間で約3万人が訪れ、家族連れなど多くの観光客が鶴田町の甘いスチューベンを堪能しました。

イベントでは、スチューベンの生搾りジュースやソフトクリームなどが販売されたほか、果汁を生地に練り込んだ棒パン焼き体験などが行われ、初日には先着100人にスチューベン大福が無料で振る舞われました。

スチューベンの食べ放題も先着50人限定で行われ、平川市から家族で訪れた高橋杏珠ちゃん・杏果ちゃん姉妹は「甘くておいしくて、お腹いっぱい食べました」とスチューベンの味に満足していました。



(右) スチューベンを丸ごと1房使った生搾りジュースは大好評



スチューベンの
おいしさを
求める需要は
高まっています

有限会社
津軽ぶどう村 代表取締役
須郷 貞次郎 さん

津軽ぶどう村では、スチューベンの栽培から加工品の製造・販売を行っています。産地直送にこだわり、新鮮なスチューベンを消費者にお届けしています。

中粒でこれほど甘いブドウはスチューベンだけです。スチューベンを全国にPRするため、鶴田町が生産量日本一であることや糖度の高さをキャッチコピーとして使い、贈答用の化粧箱を考案するなどして、消費者の目に止まるような工夫をしてきました。

スチューベンのおいしさである甘さを求める全国からの需要は年々高まっています。今後も品質向上を目指しながら、PRに力を入れていきたいですね。



生産量日本一の
スチューベンを
ブランドとして
全国に広めたい

津軽ぶどう協会 会長
成田 義弘 さん

スチューベンは手間がかかる農作物ですが、丁寧に作業した分、美味しく良質なものに仕上がります。長年、スチューベンを栽培していますが、きれいなブドウの形を作る「房作り」が一番難しく、商品として販売するための大切な作業です。

近年、町と生産者が一体となってPRをしている効果か、全国からの問い合わせが増えており、スチューベンの認知度が高まっていると感じています。

今年のスチューベンは例年以上の最高の味に仕上がっています。これほど甘いブドウは他にないので、ブランドとして全国に広めていきたいですね。



△青山副知事（右）にスチューベンをPRする相川町長

県庁でスチューベンの魅力をPR

10月6日（木）、相川町長と津軽ぶどう協会の成田会長らが青森県庁を訪れ、青山祐治副知事にスチューベンのPRをしました。

相川町長は「日本一の生産量を誇る鶴田町のスチューベンの魅力は糖度の高さです」とアピール。成田会長は「今年は天候に恵まれ、糖度が高く最高の仕上がりになった。今後も日本一のスチューベンを作りたい」と意気込みを述べました。スチューベンを試食した青山副知事は「ブランド化にも取り組んでいることで全国の皆さんに知ってもらえるようになった。今後も力を合わせて生産量を増やし、販路拡大を目指してほしい。県も支援していきたい」と述べていました。



△園児に見送られ、スチューベンゆうパックを載せたトラックが出発

全国の消費者へゆうパックが出発

町特産のスチューベンを全国の消費者に届ける「スチューベンゆうパック出発式」が10月7日（金）、道の駅つるた「鶴の里あるじゃ」で行われました。

式では、ひなづる幼稚園の園児が和太鼓の演奏でゆうパックの出発をお祝い。津軽ぶどう村の須郷代表取締役によると、今年のスチューベンは、例年に比べ着色が足りないものの、食味は良く、甘さがギュッと詰まったブドウに仕上がったといいます。

ゆうパックは昨年以上の予約を受けており、この日は園児もトラックへの積み込みを手伝い、スチューベンゆうパック930ケースが発送されました。記念のテープカット後には、スチューベンが積み込まれたトラックが園児に見送られながら出発していきました。